

古田織部とオリベ陶

Oribe HURUTA and Oribe-To (Pottery)

國分 義司

Yoshiji KOKUBUN

1

古田織部とオリベ陶⁽¹⁾の関係については、オリベ陶は古田織部の指導のもとにできたものであるとする見方と、両者の間にはとりたてて深い関係は見られないとする意見とに分かれている。前者は特に、オリベ陶の「ヘウゲタ」⁽²⁾形が、古田織部の茶の湯における「侘び」の思想から出たもので、それが、当時の天下一の数寄の師匠である古田織部の指導なしには成立し難いというものである。それに対して後者の立場に立つ人は、前者の立場の人の理論は単なる推測に過ぎず、オリベ陶は古田織部の指導を受けてできた可能性と同等の確率で、彼とは全く交渉なしに、陶工たちの独自の創意によってこの世に出たと主張する。もし指導を受けたのなら、例えば、利休の茶碗に見られる「切型」⁽³⁾のようなものが存在するとか、小堀遠州の『古織正伝慶長御尋書』の例のように、美濃の陶工たちが古田織部を訪ね、「侘び」の茶にふさわしい焼き物の形や文様について尋ねたことを証明し得る資料がなければならない。しかし今のところそれが欠けているとする。

これら二つの立場のうち、前者の中には、その陶器の形体や文様などの特徴や美について論じることや、それらの創造に至る時代思潮を探るに急で、古田織部はオリベ陶の指導に関与したかどうかなどは、小事として片付けて一向に意に介さない人と、あくまでも両者の関係を明確化したいと、研究の主眼をそこへ向ける人がいる。

『やきもの随筆』⁽⁴⁾の著者、加藤唐九郎は、一作陶家として、創作を通じてオリベ陶の魅力の全てを追及してきただけでなく、そのほかにも彼独特の学問的な欲望から発した多くの研究成果がある。この書も他の追隨を許さな

い成果のひとつである。

加藤唐九郎は、上記書中「やきもの東と西」のなかの二つの章でオリベ陶と古田織部の関係についていくつかの問題を提起している。それらのうちのひとつの「志野・黄瀬戸・織部」の章では、

1)「広い意味での織部焼という名称は一体何時頃起ったか」、2)「狭義の織部焼は何時頃焼かれたか」。

またもうひとつの「古田織部正と瀬戸焼」の章では、

1)「古田織部の武人としての生活を伝ふるもの」、2)「古田織部の領地のこと」、3)「茶人古田織部」、4)「古田織部の茶湯に於ける態度は如何」、5)「古田織部と当時の瀬戸焼の不可分関係」、6)「古田織部が如何に瀬戸焼を使用したか」などである。

ここにはすでに古田織部と瀬戸焼の全てが網羅されているとあってよい。特に5)の「古田織部正と瀬戸焼」の章については、唐九郎は、その不可分性について「動かし難い事実だが、これが史実の根本資料と目すべきものは残念乍らいまだ発見されていない」⁽⁵⁾と記し、また6)についても唐九郎は、古田織部の茶会にける瀬戸焼の使用傾向を丹念にしらべたうえで、「之から直ちに一定の結論を抜き出すことは頗る危険である」⁽⁶⁾とのべている。

現在では、『やきもの随筆』の発表後すでに半世紀以上経過している。その間次第に他の資料も明らかになってきて、データの付加とそれによる考察の深化はいくら増大した。ここでは上記の5)と6)を中心にその再評価を試みながら当時の彼の視点の補完を目指す。その際、上記の唐九郎の著書の二つの章だけでなく、他のいくつか項にも言及することは言うまでもない。

2

唐九郎は「古田織部正と瀬戸焼」の章の問題提起の6)のなかで、古田織部が茶会で使用した茶陶の使用頻度を調べ、その結果を次のようにまとめている。

『古織会書』⁽⁷⁾より

『古織会附書』より

「茶碗」瀬戸2、唐津5、黒今焼2、黒瀬戸2、今焼1	瀬戸50
「水指」備前5、唐津10	瀬戸35、伊賀14
「花入」備前2、唐津2、信楽2、瀬戸1	伊賀22、備前26
「水甕」瀬戸1、備前9、	瀬戸6

以上のほかに、『古織公伝書』の中の5回の織部会と『織部正伝抄』の統計もあるが、これらの書については本人が自ら「雑載」との理由で資料価値に疑問を呈しているため、ここでは省いた。

この表について唐九郎が指摘していることをまとめると、①古田織部が用いた茶陶は、瀬戸、唐津、備前、信楽と多岐に渡っている。②『古織会書』では、瀬戸物の使用は、黒瀬戸や黒今焼を含めても、全44点のうちの8点に過ぎず、特に多いわけではない。しかし③晩年の『古織会附書』を含めると、それは圧倒的多数を占めることなどである。

古田織部の自会記については、現在では市野千鶴子校訂の『古田織部茶書二』において、「織部茶会記」⁽⁸⁾として、古田織部の自会と一部彼が参加した重要な茶会を総覧できるものを提供している。これに拠って古田織部の全ての自会（72回）だけを改めて表にしたものが別表⁽⁹⁾である。そしてこの表から唐九郎と同様の統計を試みたものが以下のものである。なお、同書では、『古織会附』⁽¹⁰⁾〔全49回〕については別掲しているが、本来は校訂者自身が記しているように、「織部茶会記」に加えるべきであろう。その場合の合計は122回となり、その精度は高まるので、唐九郎の推論以上のことが知り得るはずである。なお『古織会附』の統計結果は唐九郎のものとはほぼ同一である。

- 「茶碗」 瀬戸8、唐津11、黒今焼1、黒茶碗10、今焼4、高麗茶碗8、信楽5、焼き損ないの茶碗2、備前1、焼茶碗1、今高麗茶碗1、とやまの黒茶碗1
- 「水指」 備前19、唐津17、瀬戸4、信楽9、伊賀4、筋の水指2、焼口水指1、きの国やきの水指1、今焼き1、明州水指1
- 「花入」 備前10、唐津1、信楽3、瀬戸1、伊賀1、三角筒2、かねの花入1、土の花入2、古銅1、丸き唐物2、ひょうたん花入1
- 「水甕」 瀬戸1、備前19、信楽4、青磁2
- 「茶入」 勢高30、辻堂9、瀬戸3、今やき3、真如2、唐津1、国なし1
- 「皿」 瀬戸皿8、唐津6、ルソン2、焼皿1、瀬戸の青皿3

「茶碗」の項の瀬戸には「やきそこないのせと茶碗」、「白茶碗瀬戸」「黒瀬戸」「瀬戸（の）黒茶碗」「瀬戸みしま焼の茶碗」など、瀬戸の地名を付したものの全てを含めた。黒今焼1、黒茶碗10については、長次郎の黒茶碗を古田織部が使うことはないため、これも瀬戸に加え、「焼き損ないの茶碗」2も、確実に瀬戸ものであるからこれも加え得る。全体では、「茶碗」は瀬戸か唐津、「水

指」は備前か唐津、「花入」と「水瀕」は備前、「茶入」は、辻堂も瀬戸物だから、唐物の勢高と瀬戸、「皿」は青皿も加えた瀬戸と唐津となる。これによって古田織部好みの組み合わせがかなり鮮明になり、これに晩年の『古織会附』のものを加えると、やはり瀬戸物は圧倒的多数になる。『古織会附』のなかに唐津が抜けているのは、おそらく江戸へ下向しての集中的な茶会であったために、何らかの制約があって、唐津の使用を中止したとも考えられる。

次に見方を変えて使用年代ごとに再度古田織部の好みの茶陶を総括すると、慶長6年以前は高麗もの、同6年代は瀬戸物、同7年代は信楽、同8年代は唐津と備前、伊賀は晩年に近い同13年以降という傾向もみられる。

上のほか、瀬戸物について、その色を中心に器種を分けると、先ず慶長6年4月18日の「白茶碗瀬戸」は、「志野」らしい。それよりも早く世に出たとみられる「黒茶碗」は、織部会では同年の7月16日が初出である。慶長4年2月8日の有名な記述「ウス茶ノ時ハ、セト茶碗、ヒツミ候也、ヘウケモノ也。」は、その形についての神屋宗湛の表現であるが、おそらく「瀬戸黒」、「黒織部」、「織部黒」のいずれかであろう。同じ日の茶入についても「肩衝ハ、セト也、葉黄ニシテ下ハル也、辻堂ト申也」と色の記述がある。これは当時すでに完成していたと見られる「黄瀬戸」とみて間違いはない。「青織部」については、慶長13年5月19日の「せとのあふき皿」と「せとのへき皿」⁽¹¹⁾がそれで、使用時期はかなり遅い。いずれにせよ古田織部は、白、黒、黄、青、全ての瀬戸物を使用したことがこの表から読み取ることができ、先に見た瀬戸物の使用回数の優位性と合わせて資料的な証明となし得る。

3

加藤唐九郎が「古田織部と当時の瀬戸焼の不可分関係」に多くの頁を費やしていることは前述した。ここで彼がいう「不可分関係」とは、古田織部が瀬戸焼の指導をしたか、あるいはなんらかの影響を与えたことを証明し、さらに彼の存在なしでは現在ある「オリベ陶」の創造はなかったと論じたかったのであろう。しかし問題は、資料がないといいながら、いくつかの実例を挙げ、それにかかなり深い考察も加えて説得力のある論調を展開していることである。それらの要点は次のようなものである。⁽¹²⁾

- 1) 『尾張名所図会』にある「瀬戸十作」は伝説とみられるが、その伝説が存在することそれ自体に関心をもつべきである。
- 2) 『茶器弁玉集』と『別所吉兵衛書』に、『鳴海織部』は古田織部が城意庵に焼かせたものとするのは正しい。なぜなら彼の息子や孫が後に古田織

部の茶会に出ているから。

- 3) 同じく鳴海窯の成立にかかる福島正則説は、彼が古田織部の弟子であり、現在の名古屋城内の「猿面茶室」の造営への関与が事実なので、瀬戸焼への関与も無視できない。
- 4) 「猿面茶屋」創立当時、熱田加藤家に止宿していた古田織部は、加藤氏のはからいで瀬戸に赴き、そこで焼いた志野茶碗が名古屋の岡屋惣助氏所持の志野平皿である。
- 5) 古田織部はたびたび駿府や江戸表間を往復しているが、その間出身地である美濃の土岐郡を訪れる機会はたびたびあったし、その地を支配していた妻木伝兵衛の子息の長戸守頼は織部の茶会にもでている。
- 6) 慶長年の初代美濃奉行の大久保長安は、織部門下の大久保忠隣の子息であるから、彼も織部とは知遇を得ていた可能性がある。
- 7) 古田織部の実弟の桑原次右衛門のゆかりの地は土岐の久尻の付近であり、織部の女婿の鈴木左馬助は大久保長安に属していたので、美濃の窯場の検地の際に織部の内意を伝え得る立場にあった。

以上は、まさしく唐九郎自身が語るように状況証拠にすぎない。しかもここに見られる古田織部と瀬戸焼あるいは美濃の窯場との不可分関係の証拠には、いくつかの共通するものがある。ひとつは、1)、2)、3)、4) は、永祿から天正初年までの古田織部の事跡が不明の時期のもの、また5)、6)、7) は、逆に彼の交友関係の複雑な慶長の終わりごろのものであって、彼の事跡の空白を突く推測に過ぎない。もうひとつは、その多くは、古田織部が窯元へ赴いて陶工達を指導するという構図が強すぎることである。全体として瀬戸物の陶工達は、誰かの指導を待ってのみ作り出した、という構図が固定された観念となっている。

しかし興味深いのは、2)や5)に見られるように、オリベ陶の生まれ故郷の陶工やその関係者が江戸の織部茶会に出ていることを唐九郎が指摘していることである。別表の「古田織部茶会の全記録」では、参加者名は省略したが、その総数だけは載せておいた。それを数えると「織部茶会記」(全72回)の参加者は累計で約300人(うち参加者名があるもの152名)、『古織会附』(全49回)のそれは、累計277人である。結果として古田織部の茶会に出席して、彼の茶会の道具立てや、彼の茶の理念を自分のものにしようとした人たちが、実数で400⁽¹³⁾名近くいたことになる。

主な参加者に、織田有楽斎、伊達政宗、毛利輝元、藤堂高虎、大野治長、本阿弥光悦、春屋宗園などの大物政治家、宗教家、芸術家がいたことは知ら

れている。しかし古田織部会の大きな特徴のひとつは、上記の人たちのような身分の高い参会者だけでなく、大工、塗師、かべや、竹屋、糸屋、茶屋、鳥売りなどの商人や職人も多数参加していることである。茶会記の筆者である今井宗久、神屋宗湛、松屋久好などの堺や博多や奈良の富豪も含めたこれらの多様な職の人たちが、それぞれの立場に立って意見を述べたり、質疑応答をしたことも予想され、また会の終了後には、彼らはそれぞれの職業のもとに帰って、知人友人にその様子を伝えたことも考えられる。

こうなるとここで改めて当時の茶会、特に古田織部の茶会について再考してみなければならない。おそらくそれは単なる遊興的な茶寄せではなく、利休のそれにみられたような宗教的求道の場でもなかったであろう。一般に茶会は2幕物の4時間にわたるドラマとも言われるが、古田織部の会は、茶会の記録を見た限りでは、さながら時代思潮についての談話会、工芸美術に関するゼミの場、茶室という空間構成の実験実習、「侘び」の理念の研究会の様相を呈していた。

例えば、先に挙げた小堀遠州は、最も熱心に古田織部の会に参加しただけでなく、彼の家に押しかけてまで、茶事に関する多くを学びとり、その成果を『古織正伝慶長御尋書』や『宗甫公古織へ御尋書』⁽¹⁴⁾という本にまとめたことは有名である。同じく古田織部から茶の湯の指南を受けた将軍秀忠も、学んだことを丹念に記録し『台徳院(秀忠)様御尋古田織部正請(こたえ)』⁽¹⁵⁾という書物を後世に残した。これらのことを考慮すると、茶会は、時代を生きるための必須事項を習得するための公共的な学習の場のひとつであつといえるかもしれない。

このような行動様式は、当時はかなり普遍化していて、茶会による情報の伝達は、現代の予想以上に広範に渡っていたと思われる。これについては、加藤唐九郎が、『やきもの随筆』のなかの「古田織部正と瀬戸焼」の章の4)「古田織部の茶湯に於ける態度は如何」の項に引用された次の文からも理解できる。

「…古田織部なる者がいて、ことごとくに天下一を称している。花や竹を植えつけたり、茶室をしつらえたりすれば、かならず黄金百枚を支払ってかれに鑑定をもとめる。炭を盛る破れ瓢、水汲み用の木桶でも、もし織部がほめたとなれば、もうその値は論じるところではない。…」⁽¹⁶⁾

これは慶長の頃、朝鮮使節として来日していた姜坑が著した『看羊録』の一節で、古田織部について特記した部分である。姜坑の記述の調子がかなり批判的なのは、彼の身分は使節とは言っても、日本への報復を企てる国王か

ら特命を受けた密使であり、上の文はその報告書の一部であったからである。しかしこれを見ても古田織部の世評はかなり高かったことがわかり、彼の手法の伝達の担い手の多くは古田織部を支持する市民、職人階級に属する人達であって、彼らが古田織部の思想のもとに創造活動に取り組んでいる様子が生き生きと感じ取れるほどである。

4

上の姜坑の『看羊録』には「鑑定をもとめて黄金百枚を支払った」とある。それをそのまま鵜呑みにすべきではないが、古田織部から多くを学び取ろうとする人たちがいる反面、彼の評価を頼って窯場の再興に挑む政治家や新製品の開拓を試みる陶工や、それを売り込もうと目論む商人たちがいたことも事実である。

慶長8年4月25日に古田織部会に登場した唐津藩の城主、寺沢志摩守広高もその一人かもしれない。尾張出身で秀吉の密使として博多表で活躍した寺沢広高という男は、文禄の役で波多氏滅亡後、唐津藩主として六万三千石を領するまでになっていた。着任当初は波多家の残党の抵抗が厳しく、反乱者の一掃と一門の懐柔に全力をあげた寺沢広高は、後に寺沢の善政と評価されたいくつかの政策を行った。そのひとつに、慶長8年ころの旧波多家の陶工たちへの優遇策があり、その結果唐津領内には続々と陶窯が開かれた。

寺沢広高を招いた会に次ぐ慶長8年4月29日の昼会では、古田織部は、茶碗、水指、花入と、全て唐津ものを使用している。しかもこの日の客には、多数の堺衆が招かれ、「織部殿御出候て、あいさつ候て、…」⁽¹⁷⁾とあるから、これは古田織部が唐津ものの復興に力を入れる友人の支援のために、参会者たちにその趣旨を訴え、その披露を兼ねた茶会であった可能性もある。寺沢志摩守の来訪以来、古田織部の茶会での唐津物の使用頻度は極端に多くなり、慶長8年内の20回の茶会では、唐津茶碗10回、水指11回、花入2回、唐津焼の皿3回、唐津ヤキの酒注ぎ2回と集中的に使用されている。

同じようなことは慶長13年1月7日の大野修理太夫治長が招待された茶会にも言える。それまで全く使用されていなかった伊賀ものが、その日はじめて使われ、その後何度か連続して使われるようになるからである。これは唐津の場合と同様である。

問題は、慶長6年から7年にかけて古田織部が、茶碗、水指共に「しがらき」ものを多用したことである。これらは「伊賀」の誤記ではないかとも思われ⁽¹⁸⁾、もしそれが当たっているならば、年代的にも筒井定次が伊賀の領主であった時

代の「筒井伊賀」と呼ばれるもの、すなわち古伊賀ものと推測され得る。とするとこのとき大野修理が持参した新しい伊賀ものの水指と瓢箪型の花入は、藤堂高虎時代のそれであろう。定次失脚と共に廃窯となった伊賀窯の復活がかかっていたのもこの頃である。大野治長は、「破袋」⁽¹⁹⁾の鑑定を古田織部に依頼したことで有名な大野主馬首治房の兄であり、古田織部の弟子として知られるが、秀吉の死後大阪落城に殉じた政界の大物である。この日の同伴者は本願寺の門跡様と大徳寺の春屋宗園であった。この二人の大物の評価も得たかったのだろうか。

次には、たった一度だけしか使われていない珍しい茶碗、すなわち「今高麗茶碗」と「富山の黒茶碗」についても考察を加えたい。

慶長6年閏11月20日の昼会は、古田織部にとっては記念すべき生高（勢高）肩衝御開の会で、床には、これも有名な利休の書、「なみだをながし申候つばほ返し申間敷候」の掛け軸を掛けての茶会であった。しかし茶碗はなぜか「今高麗茶碗」であった。「今高麗茶碗」と「今」が付されているが、この「今」は、「今やき」の「今」であり、最新作を意味するから、それは高麗人の新作茶碗と考えるのが順当であろう。そして当時来日していた高麗人といえば、浮かんでくるのは初代高麗左衛門、すなわち毛利輝元が朝鮮の役の折に日本へ連れてきた李敬その人である。

毛利輝元は関ヶ原の合戦で豊臣方に味方をしたために慶長九年に萩に移封されたが、その折、李敬をも伴って萩に行き、そこで彼に茶陶を焼かせた。これが後の萩焼である。李敬の来日は文祿の役頃であるから、萩に移る前の慶長の初年には、すでに焼成が試みられたことは十分に考えられる。しかもこの会より2年以上前の慶長4年2月28日の織部会に招かれた輝元が、季敬の新作茶碗を織部に贈った可能性は十分あるし、『四祖伝書』⁽²⁰⁾の著者がそれを「今高麗茶碗」と表現した可能性も大いにあるわけである。

「富山の黒茶碗」については、加藤唐九郎の著書『黄瀬戸』⁽²¹⁾の中に、「この年（文禄2年）、瀬戸の陶工彦右衛門が前田利家に聘せられて、越中で所謂越中瀬戸を始めて茶器を焼いた」とある。古田織部は前田利家とは直接かわりはないが、彼の嫡男の利長は、古田織部の茶の弟子といわれている。彼は慶長3年に金沢城に移る直前まで富山城の城主であったことから、当然富山の黒茶碗を持つことができる立場にあったし、その茶碗を古田織部に贈る可能性もあった。この越中瀬戸ものの茶碗が、なんらかの経路をたどって、古田織部の手に渡ったのだろうか。この日、すなわち慶長8年正月5日は、茶会記の筆者の今井宗久が古田織部の義兄の藪内詔智と連れ立って年頭の礼に

織部家を訪れての会であった。

5

茶会にはさまざまな階層の人たちが集まり、さまざまな情報が交換され、しかもそれらの情報が、時代の思潮や理念に収斂しながら伝達され、流行のものの形や色彩が決定される要素になり得る事は、この茶会記そのものからも伺い知れる。このことは、例えば茶陶では、茶会で得た情報をもとに、ほどなく各地で生産され、直ちに消費地の都市や城館などに運ばれてきた経過も理解できるようになってきた。これについては、最近の各地の埋蔵文化財の発掘調査報告によってますます明らかになっている。

特に近年の洛中出土の大量の桃山茶陶の発見の報告には目を見張るものがある。京都の三条界隈の「せと物や町」を中心とした弁慶石町、中之町、下白山町などの発掘は、昭和62年から現在まで、約30年にわたって続けられ、すでに結果が公表されている。それによれば「中之町（中京区三条通柳馬場東は入ル中之町）からは復元可能な三分の一以上の破片で概数を出すと、一五〇〇点近い陶磁器が出土した。織部、志野、志野織部、鼠志野、天目茶碗、黄瀬戸などがあり、美濃の製品が八割を越えた。…」⁽²²⁾とある。しかもこの地には天正18年（1590）から寛永元年（1624）までの間、「せと物や町」が成立していたことについても、この報告は次のように記している。

「寛永元年から三年（一六二四―二六）の何れかの時点で描かれた『京都図屏風』や寛永三年頃に刊行されたとする『都記』には、三条界隈の茶陶集中出土地は「せと物や町」と記されている。慶長年間（一五九六―一六一五）末頃の作と考えられる『洛中洛外図屏風』（勝興寺本）には、この「せと物や町」で商品を売っている状況が描かれ、三条界隈の陶磁器の出土状況とよく符号する。」⁽²³⁾

この報告書はさらに、何人かの豪商の屋敷跡の発掘とならんで古田織部の屋敷跡の発掘をも手がけている。そこ（中京区東堀川通錦小路ル四坊堀川町）からは、総織部向付、青織部角皿、鼠志野皿、唐津鉢、唐津沓茶碗、備前鉢などが出土しており、それは慶長年間の織部茶会さながらで、茶会で使われていたものが、実際に目の前に見せつけられるようになった。織部屋敷と「せと物や町」が身近なものになると、慶長の織部茶会も非常に身近なものになってくる。しかも古田織部は当時、弟子たちを連れて「せと物や町」へ赴いていたことも文献的にすでに知られている。『茶道望月集』⁽²⁴⁾には次のような一文がある。

「織部殿の時分八口切前に三条通瀬戸物町へ織部殿好の焼物何によらず瀬

戸より数多持参して有しを織部侘の弟子中を連行目利して茶入茶碗花入水さし香合等迄夫々に取らせ侘の弟子中ハ夫にて銘々口切をせしと也 其時分の焼物茶具鉢皿類迄今に澤山に世上に残りしと也 代物ハ其時大かた貳錢目を限しと也 古風成事也 道具の風ハ面白く古織とて一手の宗匠ぞと也 其後古織などの先達も不出遠州宗旦にてととめしと也」

この文からわかることをまとめると

- 1、「せと物や」は瀬戸より多数の焼き物を仕入れていた。
- 2、道具の風体は「面白い」物だった。
- 3、古田織部は、この「せと物や」へ弟子たちを連れてゆき、口切用の茶陶を選ばせた。
- 4、選ぶ基準となる理念は「侘び」であり、代金は二錢を限りとした。
- 5、この町は寛永元年（1624）に無くなったが、この話題は『茶道宝月集』が書かれた享保年間（1716～1736）になっても語り継がれていた。

唐九郎は、古田織部と瀬戸物の不可分性については「動かし難い事実だが、これが史実の根本資料と目すべきものは残念乍らいまだ発見されていない」と記していたことは前述した。しかし「茶会記」の記録に加えて「せと物や町」跡の発掘資料と上の『茶道望月集』の中の一文をはじめ、当時の『看羊録』のような証言記録を付き合わせると、これらは唐九郎が求めた史実の「動かし難い事実」に近いものと見做すことができるのではないだろうか。（了）

注

- (1) 一般に「桃山陶」とも「瀬戸物」とも言われている16世紀初頭から17世紀中葉にかけて、美濃地方の主に土岐、多治見、可児地区で生産され、後に黄瀬戸、瀬戸黒、志野、織部等と分類されたもの。ここであえて「オリベ陶」としたのは、当時茶会記などで使われた「瀬戸物」は近世以降、瀬戸、赤津、品野地区で量産された同名の商品との混同を避けるためであり、また「桃山陶」は信楽、備前、伊賀、唐津などの陶器も含まれるのが通例だからである。
- (2) 「ひょうげ(瓢化)た」、「おどけた」、「ゆがんだ」の意。別表の慶長4年2月28日の項に、『宗湛日記』に初出の「セト茶碗、ヒツミ候也、ヘウケモノ也」がある。
- (3) 道具の製作を注文するとき器物の形をスケッチし見本にするもの。千利休、神屋宗湛のそれは広く知られているが、古田織部のものは、しばしば語られる割には実物は存在しない。
- (4) 『やきもの随筆』加藤唐九郎著、徳間書店1987、初版は、1962年6月30日であるが、本論では、1987年4月30日付改定十三刷をテキストとして用いた。
- (5) 『やきもの随筆』、187頁。
- (6) 同上書、193頁。

- (7) 加藤唐九郎が執筆当時入手し得た古田織部の茶会（自会）記録は、慶長8年正月十三日から同年十二月二十一日までの22回と極めて少ない。『やきもの随筆』193頁。
- (8) 『古田織部茶書一、二』（茶湯古典叢書三）市野千鶴子校訂、昭和59年5月、思文閣刊。なお「織部茶会記」には、『今井宗久茶湯書拔書』、『宗及茶湯日記』、『茶道四祖伝書』、『宗湛日記』、『利休百会記』、『松屋会記』、『旁求茶会記』が含まれている。
- (9) 表には唐九郎の統計表と比較するために、「茶入」は含めなかったが、古田織部の「茶入」の使用状況は、本文の表中には加えた。また唐九郎が取り上げなかった皿も加えた。そこには青織部とみられるものが含まれていたからである。
- (10) 加藤唐九郎は、これを『古織会附書』と「書」を加えているが、市野千鶴子校訂のは『古織会附』である。また回数も加藤唐九郎のものは1回多い50回である。
- (11) 「あふき皿」、「へき皿」は、それぞれ「青き皿」「碧皿」で、現在の「緑」色。
- (12) 『やきもの随筆』187頁～191頁。なお筒条書きにしたのは筆者。
- (13) 「織部茶会記」と『古織会附書』にある会席者の累計の合計は500名を越すが、同じ人物が何度も招ねかれていることもあり「織部茶会記」の実数は約半数であったし、『古織会附』の方は数えていないが、各会とも記録者や、多数の相伴客がいたこともあるので、この程度と推測した。
- (14) 『古田織部茶書一』は、全巻を『古織正伝慶長御尋書』と『宗甫公古織へ御尋書』で占めている。
- (15) 『古田織部茶書二』420頁より引用。なお市野千鶴子氏はこれを、『「小堀遠州」（森温、恒久一訓共著）から紹介させていただく」としている。
- (16) 『やきもの随筆』176頁には原文で掲載されているが、本稿ではそれを意識した。
- (17) 『古田織部茶書二』91頁。
- (18) これについては『古田織部茶書二』にはない白会記が、井上喜久男著「日本陶磁の流れ（26）」（日本陶磁協会発行「陶説」連載、2005年4月625号76頁）に、以下のようにあるので引用しておく。[…筒井時代には、・ ・ ・慶長六年正月二十九日の「伊賀焼の水指」・慶長七年正月九日「三角ノ伊賀筒」・慶長七年五月十三日の「水指伊賀焼」、慶長八年四月二十九日の「伊賀焼水指」・同年五月二十三日の伊賀焼ノ筒」（『古田織部自会記』）などがあり・ ・ ・]
- (19) 伊賀耳付水指、重要文化財指定の際につけられた銘。藤堂家伝来のもので古田織部の消息があったが、大正十二年の震災時に元箱とともに消失した。
- (20) 『茶道四祖伝書』（茶湯古典叢書一）松山吟松庵校註熊倉功夫補訂、昭和49年4月、思文閣刊。慶安2～5年ごろ松屋久重によって編まれた茶書。[利休居士伝書全]「三齊公伝書」「古織公伝書全」「甫公伝書全」の4冊よりなる。
- (21) 『黄瀬戸』加藤唐九郎著、寶雲社、昭和八年三月十五日発行、63頁。
- (22) 「洛中桃山茶陶発掘30年」永田信一、『陶説』624号、2005年3月33頁。
- (23) 同上書34頁。
- (24) 『茶道望月集』享保八年九月久保風後庵又夢著。本書は昭和26年4月23日庸軒會発行『茶道望月集下』（監修者猪股無倦、発行者伊藤庸罌、筆耕者同左）による。同書第四拾六巻追加之中296頁。

別表. 古田織部茶会全記録

日時	茶碗	水指 (水翻)	花入、(皿)	(参会者) その他	参会者 (数)
天正 17.2.9 朝 (今)	高麗	瀬戸			(4)
文祿 5.3.9 (四)	瀬戸	瀬戸			(2)
慶長 2.9.11 (四)	高麗	信楽			(3)
4.2.21 朝 (四)	焼茶碗	信楽 (備前)			(4)
2.28 朝 (湛)	高麗茶碗ニシテ 曆手、ウス茶 セト	セト (三足の青 磁)		「ウス茶ノ時ハセト茶碗ヒ ツミ候也ヘウケモノ也」 辻堂肩衝 「肩衝ハセト也 葉黄ニシテ下ナル也」 (毛利輝元)	(3)
10.10 朝 (今)	かうらい茶碗	備前	(セと皿)		(2)
10.17 朝 (四)	高麗茶碗	瀬戸	備前筒		(2)
5.12.8 朝 (今)	かうらい茶碗	備前	(せと皿)		(3)
6.1.24 昼 (今)	焼きそこないの 瀬戸茶碗	備前	備前 (せと四方 皿)		(3)
1.29 昼 (今)	焼きそこないの 茶碗				(11)
4.18 八ツ時 (四)	白茶碗瀬戸	信楽			(2)
7.16 朝 (今)	くろ茶碗	備前 (備前)	備前三角筒		(35)
7.20 セツ時 (今)	黒茶碗		三角筒 (セト四 方さら)		(2)
11.13 (今)	かうらい茶碗	しからき			(2)
11.14 昼 (今)	焼きそこないの 茶碗	しからき	備前三角筒 (せ と皿、るすん皿)		(3)
閏 11.20 昼 (今)	今高麗茶碗	信楽友蓋 姥口	備前筒	備前香合 生高肩衝御 開 掛物ハ「なみだをな がし申候つば返し申間 敷候」の文也	(3)
2.5 夜咄 (今)	かうらいやきの 茶碗	しからき		(小堀作介)	(6)
12.14 夜咄 (今)	しがらき茶碗	しからき (備前)		(伊達政宗)	(8)
7.1.25 (今)	しがらき	しがらき (備前)	備前		(6.7)
2.9 昼 (今)	備前	(しからき)	三角つつ		(5)
5.13 (今)	黒茶碗	(備前)			(5.6)
6.2 (今)	しがらきの茶碗	きの国やきの		人形のさかつき	(4)
10.18 昼 (今)	しからき	しからき	(せと皿)		(2)
2.14 昼 (今)	しからき	からつ			(2)
8.1.5 (今)	とやまの黒茶碗	からつ焼		(藪内紹智)	(1)

1.13 昼 (旁)	せと		備前筒		(3)
2.1 昼 (旁)	今焼	備前 (備前)		(小堀作介)	(4)
2.7 (旁)		備前 (備前)		薄茶中次	(5)
2.23 (旁)	黒今やき	唐津 (備前)	唐津		(3)
3.10 (旁)		唐津足有	から津		(3)
4.20 之朝 (旁)	から津焼	筋の水指 (備前)			(4)
4.25 (旁)	茶碗黒今やき	唐津焼筋の水瓶 (備前)		(寺沢志摩)	(3)
4.29 昼 (今)	からつやき茶碗	からつやき	からつやき花生		(堺衆)
5.19 (旁)	唐津口のくろき	備前 (備前)		瀬戸肩衝	(4)
5.22 朝 (今)	からつやき	今やき			(3)
5.24 昼 (旁)	から津口黒	備前 (備前)			(3)
6.3 (旁)	からつ茶盆	備前 (備前)			(7)
6.4 (旁)		備前 (備前)			(3)
7.3 (旁)	瀬戸	(備前)			(3)
7.25 朝 (今)	からつ	からつやき	(からつやき皿)	酒つきはから津	(2)
8.2 (旁)	瀬戸	唐津	信楽花入れ	茶入真如	(3)
8.9 昼 (旁)	瀬戸	唐津足有 (備前)	信楽の筒		(3)
8.17 朝 (今)		からつやき	から津やき花入		(3)
8.17 昼 (旁)	唐津	唐津足有 (備前手付)	信楽筒		(3)
10.4 朝 (旁)	唐津	から津	つちの花入		(4)
10.5 昼 (旁)		唐津			(4)
月日無之 (旁)	唐津	から津	瀬戸	(藤堂、小堀作介)	(3)
11.9 昼 (今)		備前 (しからき)	備前筒 (るすん大皿)		(3)
12.18 (旁)		備前			(4)
12.18 昼 (旁)	黒瀬戸	から津 (信楽焼)	備前筒		(3)
月日無之 (旁)	黒瀬戸	から津			(1)
12.21 (旁)	黒、今やき	から津	備前ノ筒		(5)
9.2.1 朝 (四)		備前 (信楽)		(小堀作介)	(2)
2.1 昼 (今)	今焼	備前 (古備前物)	(小から津皿)		(3)
5.4 昼 (今)	からつやき土の茶碗	備前	(せとさら、からつ焼皿)	からつやきのさけつき	(4)
10.22 朝 (今)	黒茶碗	しからき			(4)
10.5.25 カ (湛)	唐津ヤキ	今ヤキ			(5)

9.24 朝 (今)	今焼	備前	(からつ皿)		(3)
10.10 (今)	黒茶碗	備前			(?)
11.1.14 (今)	せ戸ミしまやきの茶碗	からつやき	(からつやきのさら)		(3)
6.5 朝 (今)	から津の茶碗	からつやき足有		せと香合	(3)
9.21 昼 (湛)	黒茶碗	備前		香合今ヤキ	(6)
10.10 昼 (今)	黒茶碗	からつ			(10)
12.13 朝 (四)	薩摩焼ノ焼茶碗	備前	信楽筒		(2)
12.13 四ッ時 (四)		唐津 (町で見つけた)			(3)
12.13 正午 (四)	新茶碗	信楽	備前筒		(3)
2.13 晩 (四)	黒茶碗	から津 (今朝町で見つけた)			(4)
12.25 昼 (今)	せとの黒茶碗	から津	土の物唐物、丸き花入 (せ戸皿)		(3)
12.1.1 (今)	せとの黒茶碗		唐物丸き土花入		(?)
13.1.7 (今)	黒茶碗	いかやきひょうたん	ひょうたん花入		(4)
5.19 朝 (今)	瀬戸黒茶碗	いかやきの水さし	いかやきの筒(せとのあふき皿、せとのへき皿)		(4)
16.9.8 夜 (四)					(6)
17.5.19 朝 (今)		いかやき	(せとさら)		(4)
11.8 朝 (旁)	せと黒茶碗あたらしき	伊賀	(青皿、せと新き丸壺)		(3)
19.6.22 昼 (今)	かうらい茶碗		(ぬり平皿)		(10)
10.29 (四)	黒茶碗	明州水指			(1)